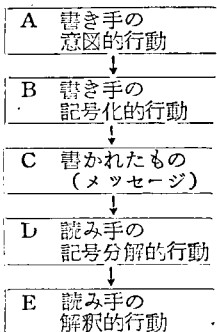


読点機能の一考察

小田 迪夫



ように分類してみた。(図式は、オスグッドの言語行動の過程を図式化したものを利用し、話し手、聞き手となっているのを、書き手、読み手とした。)

表現行動

理解行動

この図式において、読点はC・メッセージとして、文中に存在する客観的事実であり、記述された存在である。しかし、これを表現行動、理解行動のそれぞれの場に即してみると、次のようなばあいにはわかれると思う。

1 表現行動の過程において

a1 書き手の意図的行動から発して、読点を意識的にうつばあい。

A → B → C

b1 書き手の意図的行動として発しないばあいい。

①もと意図的に表現行動にうつしていたのが、習慣化により無意識にうつよう

あつかいかたや、将来、現場での読点のうち

かた指導のための何らかのよりどころが得られ、また、読点の記述的研究も、それを土台として進めることができると考えたからである。

二 言語のコミュニケーションの過程における読点

現実の読点のつかわれさまはさまざまである。昭和二十六・七年度国立国語研究所の調査の中に、いろいろな文章の点間字数を調べたものがあり、それによって、あるていど、読点のつかわれかたの事態をうかがうことができる。(コトバの科学第五巻・コトバの美学の中に掲載)

そのようなさまざまのうたれかたをする読点を、言語行動の過程の面からとらえ、次の

一 考察の動機と目的

二年生の前期に、藤原与一先生の「国語研究法」の講義で、表現の秘密性ということをおそわって以来、文章表現における読点のうちかたが気になってきた。また、中学生の作文の分析などによっても、読点のあつかいかたのむずかしさを強く意識するようになった。文部省が示している「くぎり符号の使い方」や、その道の研究家が示している句読法案によっても、読点のうちかたはきわめて複雑である。

そのような読点の使用法のむずかしさの原因を、読点の本質というものから根本的に問いただしてみることによって、追求してみようとした。そのような内省的な考察をしてみることによっても、これからの自分の読点の

になったばあい。

○→B→C

②まったく無意識的にうつもの、その時の生理的・心理的条件に無意識のうち左右されてうつばあい。

B→C

2、理解行動の過程において

a₂読み手の記号分解の行動にはうつされるが、それを解釈的行動において、意識的にとりあつかわないばあい。

C→D→E

b₂解釈的行動において、意識的にとりあつかうばあい。

C→D→E

三 説点というもの

では、なぜ説点が右のようなあつかわれかたをするのか。それを追求する手段として、まず、説点という記号自体の問題として考えてみた。

句説点なるものは、もともと、音声言語における時間的休止を文字言語における符号としてあらわしたものである。音声言語における音声とその時間的休止（無音声）のさまざまな組み合わせにより、人間は今日のような

複雑な思想表現が可能になったと考えられる。したがって、無音声の部分もまた音声とともに言語の二大要素をなすものである。では、音声と文字であらわすことは数千年も昔から行なわれているのに、無音声の部分を記号化することが、なぜ遅れたのだろうか。（西歐においても句説点の歴史はきわめて浅く、それが実用的なものとして用いられてきたからわずかに二百五十年ほどにしかならない。）

これについて、心理学者の波多野完治博士は次のように説明する。（「国語・国文」——昭和十三年十月号——句説点の心理学と修辞学、参照）われわれの精神には、柄と地という二つの分節様式があり、柄の方は意識するが地の方はあまり意識しないという傾向がある。これは、われわれが何かの模様をみるときによく経験することである。このことが言語についても言え、言語でいえば、音声部分が柄にあたり、無声部分が地にあたる。そのため、強く意識される柄の音声がはやく文字化されたのに、あまり意識されぬ地の無音声の記号化がおくれたというわけである。

ところが、句説点は、音声言語においては地であるが、文字言語においては、目で見たばあい、あきらかに柄である。文字言語にお

いては、文字の書かれた紙面の空白部分が地になるからである。したがって、句説点は、音声言語においては地であり、文字言語においては柄であるという、いわば二重性格を持つことになる。そして、われわれの精神は、柄の方は意識するが地の方は意識しないという特性を持つ。このため、さきに言語行動の過程にみたように、説点が意識的にあつかわれたり無意識にあつかわれたりするような事態が生ずるのだと考えられる。

ところで、文字言語において柄となる説点を、われわれはどのようにみとめるのか。言語心理学の興験によって、読書における眼球運動の仕方は、一字一字をたどって文字を知覚するのではなく、その運動の停止と飛躍の交互のくりかえしを行ない、その停留のさいに、一度に数個の文字を知覚するといふしくみになっていることが明らかにされている。そのような眼球運動によって読書がなされているものとすると、文中に説点があれば、それは、眼球運動の停留時における知覚文字と知覚しない文字とのはっきりした境界線を示すことになる。そのことは、必然的に、説点の前にくる文字のいくつかを凝視することになり、それによって、われわれはさきのいくつ

かの文字をまとまったものとして知覚し、その文字群を意味あるまとまりとして認識することになる。すなわち、説点は言語記号形態を一定のまとまった文字群に群化させ、それを意味のまとまりとしてとらえさせる働きをもつといえる。

時枝誠記博士は、継時的線条的表現型式とする言語が、文字言語においては視覚化によって把握される空間性を加え、図式的性格をもつようになるとし、そのことがことばの論理性を大きく高めたと述べている。（「文章研究序説」参照）それに従えば、文字言語に説点を使用することは、言語の表現をますます図式化させることになり、それが表現の論理性をより効果的に示すことになる。

しかし、ここで考えられることは、説点は、ことばの図形化を強め、言語記号形態を一定のまとまった意味としてとらえさせる働きは持つが、その意味の統一体として認識されたものと他との関連、群化されたものどおしの相互のかかわりぐあいを理解するのは、あくまで言語理解者（読み手）の心の働きによつてのみなされるということである。けっきよく、説点は、表現の流れを群化して、意味のまとまりを作る働きはするが、それによ

って群化されたもの相互の関連の仕方を示す機能はもっていないということになる。

四 日本語の構造における説点

説点によってきられたものの前後関係の問題は、そのまま、日本語の構造と説点の問題につながってくる。

試みに、説点を多くうってあるもの、ふつうのもの、少ないものの代表的作品として、獅子文六の「娘と私」、徳田秋声の「縮図」、横光利一の「機械」を選び、それぞれの説点のうちかたを調べてみると、いずれも説点の六十余パーセントを助詞のあとにうってあった。これは、日本語の構造からして当然のことである。

日本語は、膠着語の一種であり、文中において、自立語は付属語との結合、あるいは、自立語自身の活用による語形変化によって、他のものとの関連を示す。自立語と付属語とを、時枝博士が意味するところの詞と辞とにわけると、辞は、詞についてそれと他との関連を示すばかりでなく、いくつかの言語単位をまとめて一群のものとし、そのまとまりが他とどう関連しあうかを示す働きを持つ。これが時枝博士のいう、いわゆる辞の総括機能であるが、この作用は、辞がそれより以下をきりはなすことによつてなりたつ。そこできりはなすから、まとまりが生じるのであ

る。したがって辞のあとに休止がきて、それが説点で示されるばあいが多くなるのは当然である。

辞の働きをそのように考えると、これは、説点の働きと同じものであることがわかる。しかも、辞は、総括され、意味のまとまりとなつたものの相互の関連をも形態的に示すという、説点の持たない機能を有している。このため、説点は、一部の辞や、活用語の変化したものとあに、ことさら時間的休止をおくことによつて、その機能を補強するにすぎないということになる。このことは、一面からいえば、日本語の説点を示りにくくもいという性質の強いことを示している。そのため、説点のうちかたがあいまいなものとなり、一定のうちかたの定まるのが困難になるともいえる。

さらに、日本語の説点の論理的にうちにくい原因として、日本語のリズムが等時的な音数律であるということ、および、日本語の文構造そのものが、時枝博士の示される入子型によつて示されるように、内へ内へと入りこむ形になっているがために、書くという一回的継時的行為によつて文構造上、適当に説点をうっていくことがむずかしいなどということが考えられるが、これらは、今後の研究にまちたい。